

## アルファルファタコゾウムシの 関東地方における蔓延状況

佐々木 正己

アルファルファタコゾウムシ（図1および表紙写真参照）によるレンゲの被害（図2）は相変わらず深刻だが、その分布拡大が急速に進んでいるのは確かなようである。

東京で私が最初に確認したのは2003年で、玉川大学付近のレンゲ畑であった。2005年には同じレンゲ畑で2月中旬から発生状況を調べたところ、図3のように、3月に入るとレンゲの越冬苗の芯の部分から多くの若齢幼虫が見いだされた。4月に入ってキャンパス内のカラスノエンドウ（図4）での発生状況を調べてみると、多くの場所で1 m<sup>2</sup>当たり100匹を超え

る高密度での幼虫の生息が確認された。キャンパス内にはレンゲはほとんどないことから、これらカラスノエンドウ上で見つかった幼虫は、レンゲから移動したものと考えられない。カラスノエンドウはどこにでも生えている雑草であるため、事態は深刻にとらえるべきである。

多摩川流域についてロードサーベイをしてみると、ここでもカラスノエンドウ上で広く幼虫が確認された。レンゲ以外で確認されている寄主植物はカラスノエンドウだけではない。蜜源としてヘアリーベッチと同様か、あるいはむしろ良いと思われるクサフジでも食害が確認された。場所は今年6月に別の虫の調査で訪れた長野県の小諸から上田にかけての地域であった。

自身による移動分散力が大きいとは決して思えないこのゾウムシが2000年以降、わずか数年の間に全国に損分布を広げたとすれば、本種の性質に変化が生じたなどの可能性を含め、早急に全国規模でのシステムティックな実態調査が必要と思われる。

(〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学)



図1 羽化したての成虫



図2 食害によるレンゲの被害状況



図3 レンゲ苗の芯部分から出てきた若齢幼虫



図4 カラスノエンドウ上の終齢幼虫